武蔵大学と私―ゼミ同窓会での挨拶

武内　清

久しぶりの同窓会の開催（2023 年 11 月 3 日）ということで、感慨深いものがあります。武蔵大学に勤務した時代を振り返り、同時に私の現在の近況を報告したいと思います。

私が武蔵大学に専任教員として勤務したのは、1978 年 4 月から 1988 年 3 月までの 10 年間です。

私の年齢でいいますと、34 歳から 44 歳までです。武蔵大学に勤務した年の 10 月に結婚して、千葉市の埋め立て地の海の近くの公団の高浜北団地に住み、2 年後に長女、4 年後に次女が生まれています。私にとって人生の中で、一番思い出深い時代です。

その理由の 1 つは、結婚や子育ての喜びや苦労ということもありますが、同時に、勤務した武蔵大学のよさや学生の皆さんとの交流があったように思います。

武蔵大学は、旧制の私立の高等学校から大学になった学習院、成城、成蹊と 1 つの大学グループ（私立大学懇話会）を作り、私立の旧制高校の伝統を引き継ぎ、学問の伝統を大事にし、学士の自主性を大事にしていました。私の所属した人文学部の教授会メンバーは東大を退職した有名な先生方が多く、アカデミックな雰囲気に満ちていました。同時におっとりした雰囲気がありました。私にとっても最初の職場で多くのことを学びました。

受験競争の厳しい時代でしたが、学生諸君も、武蔵大学の自ら学ぶ学風や穏やかな雰囲気に触れ、受験での疲れを癒し、大学に愛着を感じるようになっていったのだと思います。

「ゼミの武蔵」と言われ、1 年から 4 年までゼミがあり、ゼミの教育や繋がりが重視されていました。私は、1 年から 4 年までの社会学科のゼミでは、合同のコンパやゼミ合宿をよく開催しました。

当時、経済学部の岩田龍子先生がゼミで行ったグループワークの方法に私も惹かれ、ゼミでもグループワークをよく取り入れました。武蔵の学生は、人がよく、自分にとって得にならないことも、教員や友人から勧められるとやってしまうというところがあったように思います。特に皆さんの学年の 3 年次のゼミの調査（『現代大学生の受講態度とその関連要因の研究』1980』）は、かなり大変で、ゼミの時間以外に膨大な時間をその集計やまとめに費やして、皆さんの春休みも潰してしまったように思います。私も 30 歳台 40 歳代の時は、若気の至りで、学生諸君にもかなりの迷惑をかけたことを、この歳になり感じます。

武蔵大学時代の私の講義やゼミでは、私の感銘を受けた本や論文をよく紹介しましたが、それを私が十分に消化して、その内容を効率よく皆さんに伝えられたかというと疑問で、その点は申し訳なかっと思います。いい授業をされていた社会学科の同僚の先生方（久山先生、星野先生、高橋先生、大村先生、小川先生、渡邊先生）を、もっと見習うべきたったと今は思います。

その後勤めた上智大学や敬愛大学では、楽しさよりは、学生に社会学や教育社会学の知識を学ばせるということに力を入れたように思います。

今年は敬愛大学で、「教育社会学」の授業を 1 コマ、オンデマンドで担当していて、とにかく多くの資料を学生に読ませて、それへのコメントを毎回 200 字から 1000 字書かせ、私も毎回一人ひとりの解答にコメントを送り、学生が勉強するようにさせています。

現在の私の普段の生活ですが、年齢はこの 8 月で 79 歳になり、敬愛大学での 1 コマの授業の他は、中央教育研究所の仕事を少し（研究仲間との調査や論文の審査等）して、内外教育という情報誌のコラムを時々書くことぐらいがやっている仕事です。それで、暇がたくさんあります。暇な日々やることといえば、読書とテニスと卓球と映画やドラマの鑑賞です。妻の運転で、いろいろなところに花を見に行くこともあります（花紀行）。

それをブログ（「武内清（教育社会学）研究室」、https://www.takeuchikiyoshi.com）に記録として残しています。

そのブログは、見る人がほとんどないない私の日記状態ですが、2007 年から 17 年は続いています。時々それを、下記のように活字にしています。

① 『学生文化・生徒文化の教育社会学』（ハーベスト社、2014、Ⅳ部収録）、
② 「学生、大学教育、学問他について」『敬愛大学国際研究第 30 号』（2017），
③ 「教育的知識の社会学」『敬愛大学国際研究同 33 号』（2020）
④ 『教育、大学、文学、ドラマ、日常―教育社会学的考察―』（2022.9）

③と④をこの 2 年間、敬愛大学の受講の学生に配り、授業資料の 1 つにしています。この中には、教育社会学や学校社会学のこと以外に、文学や、韓国ドラマや花紀行や老後の生活のことを書いています。これを皆さんにもお配りできれば、よかったのですが、もう残部がなくお持ちできませんでした。全文は、ブログの方でも読めます（202 2 年 11 月 13 日にアクセス）、興味をもった方はご参照下さい。

その抜粋を、この冊子の後の方に転載しました。。目次は、下記です。

『教育、大学、文学、ドラマ、日常―教育社会学的考察―』（2022 年 9 月）目次

Ⅰ　教育社会学とは　　Ⅱ　大学、大学教員、学生
Ⅲ　学校教育　　Ⅳ　社会学、社会心理学
Ⅴ　読書、書評　　Ⅵ　日常生活の社会学
Ⅶ　文学の社会学　　Ⅷ　韓国ドラマ、映画
Ⅸ　花紀行　　Ⅹ　定年後の生活、自分史

（以下、その冊子から、いくつかを転記しておきます。）

『教育、大学、文学、ドラマ、日常―教育社会学的考察―』（2022.９）抜粋

Ⅱ－４　現代学生考

これまでいくつかの大学で学生に接してきた経験から、大学と大学生に関して考えてみたい。自分の場合は、受験勉強を終え大学に入学して受けて授業はさっぱり心に響いてこなかった。それで大学の授業を諦め、大学外に知の源泉を求めた（読書等）。

1970 年代後半に大学教師になり学生に接してみると、大学の講義への出席率は 2 割程度と低く、大学生活の中心は友人関係とサークル活動であった（スキー、テニス、マージャンは定番）。学生たちは厳しかった受験競争の疲れを 4 年間のモラトリアムの期間に取り、企業戦士として社会に出ていった。企業も受験学力は評価したが、大学教育には何の期待もしていなかった。

1990 年代以降になると、大学の授業改革が進み、「大学の学校化、学生の生徒化」が進行して、学生たちは素直になり、授業への出席率は急速に高まった。学生たちは大学の授業から何かを学ぼうと考えたのであろう。情報化社会になり情報量が膨大となり学問が高度化しているので、どの分野でも基礎的な部分は大学で学ぶ必要が生じた。それで知識は大学の授業から得るもので、大学外から学ぶという意識は薄れていった（読書の習慣がなくなった）。

『キャンパスの生態誌』（潮木守一、中公新書 1986）によると、大学には、「自動車学校型」「知的コミューン」「予言共同体」、の 3 つがあるという。現代の大学をみていると、この 3 つが薄められた形で存在していることを感じる。資格試験や採用試験に向けての知識技術の習得（自動車学校型）、ゼミや演習の必修化（知的コミューン）、行動を推奨するアクティブ・ラーニング（予言共同体）。さらに、幼い頃からのデジタル環境の影響（スマホとゲームの世界への耽溺）と社会的貧困からくるアルバイト生活が加わる。

これらをバランスよく配置し、大学生活を送ることが今の大学生に求められている。大学生活満足度は年々上昇していることから、それは成功しているのであろう。ただ、学生の批判精神が薄れていることが気がかりである。（「内外教育」ひとこと、2019 年 10 月 8 日号）

Ⅱ－６　オチやボケのある授業ー関西と関東の大学の違い

東京育ち、湘南住まいの知人が、大阪に住み、関西の大学に勤めるようになってもうすぐ１年。彼は、大阪が面白く、たいそう気に入っているようだが、学生から、「先生の話にはオチがありませんね」と言われて、ショックを受けたということを、年賀状に書いてきた。

昔全国大学生協のシンポで、私の前の報告者の竹内洋氏（当時京都大学助教授）の話を聞

いて、青ざめたことがある。話はユーモアに満ち、ボケとオチがありで、聴衆は爆笑とともに聞き惚れていた。その後で、どのような話をすればいいのか冷や汗ものだった。居直ってデータの解説に徹し、その場を凌いだが、関西の話文化の伝統のすごさを知った。

自己卑下や自虐的などの自分を低く言うのは、関西の漫才の文化と、確か多田道太郎が書いていたと思う。つまり、漫才は、最底辺の位置に自分を置いて聴衆の優越感をくすぐるものである。ボケ（自虐）に対するツッコミは、それに対する優れたリアクションであり、関西では日常化しているという。

それから、私は自分の講義にも努力してボケ話やオチを入れるように努めたが、学生の反応はイマイチ。関東の大学で、自分がボケた話をしても関西風にツッコンではくれなくて、その通りにとられ、憐憫と軽蔑の混じった視線を向けられる。

私は関西で生活したことはないが、関西の血は流れており（父が兵庫の出身、親戚は関西に多い)、関西人の祖母によく面倒を見てもらい、関西弁、関西文化に浸ってきたので、関西の文化は身体化されているはずである。これまで関西の大学で教える機会がなく、それが試せていないのがとても残念。(2013 年 1 月 9 日)

Ⅱ－１２　オンデマンドの大学の授業　―武内 2021 年度　後期授業　「教育課程論」

今年度（2021 年度）後期は、敬愛大学で 1 コマだけ担当した。科目名は、「教育課程論」（中高向き）で、受講生は教育学部と国際学部の学生が 55 名、経済学部が 19 名、合計 74 名である。授業形態は遠隔のオンデマンドで行った。

基本的には、毎回 KCN で「講義メモ」と「授業資料」を数枚配信し、講義メモの最後に書かれている設問に、200 字から 1000 字の字数で答えるよう指示した。学生の書いた解答（コメント）には、毎回個々の学生にコメントを返したので、その数は 1000 を超えたことになる。

私の授業の場合、学生は教室での対面授業より、遠隔の授業の方がよく「講義メモ」や「授業資料」をよく読み、しっかりした解答（コメント）を、毎回寄せて来ているように思う。学生にも他の受講者の解答（コメント）の一部を解答例として、匿名で、KCN のクラスフォーラムで知らせている。今回の毎回の講義テーマは、下記のようである。

第 1 回　教育課程とは　/ 第 2 回　教育課程の 2 側面 / 第 3 回 学習指導要領の変遷　/ 第 4 回　「主体的・対話的で深い学び』とは　/ 第 5 回　教育に関する WEB サイトを読んでの感想　/ 第 6 回　学校と地域社会の関係を考える。/　第 7 回　新型コロナ後の教育/ 第 8 回　中学生・高校生の特質、生徒文化　/　第 9 回　ジェンダーと教育 /　第 10 回　受講者の解答（コメント）を読んでの感想　/　第 11 回　新型コロナ禍と教育（敬愛大学シンポの感想）/　第 12、第 13 回　総合的な学習の時間　総合探求について（静岡県立大学の学生の作品への感想）/　第 14 回　高校教師について。高校の新教育課程　/　第 15 回　まとめと最終レポート課題　　(2022 年 1 月 17)

Ⅱ－１６　大学教員と本

渡部昇一「知的生活の方法」（講談社現代新書,1976 年）を読んだ時の衝撃は忘れられない。知的生活を送る為に、誰からも邪魔されない集中の時間が必要であり、その為には手元の参照する本を置いて置くことは必須であると書かれていた。優れた研究者や作家は皆立派な蔵書や書庫を持っているという。

そのような考えが、この頃少し揺らいできた。今はネットで何でも調べられる時代である。論文の引用は本からすべきと言われていたが、今はネットからの引用も許されるのでないか。写真もプリントアウトする必要はなく、デジタルで保存した方が見やすい。映画やドラマも、これまでは優れたものが DVD 化され、それをレンタルして見るのが普通であったが、最近のドラマや映画は DVD 化を考えず、（いつでのどこでも見れる）ネット配信だけのものもあるという（ネットフリクス等)。

同じように、本もデジタルで読む時代で、それを印刷した本として残す必要はなくなるのではないか。研究者が書く論文もデジタルで読むことができれば、それを印刷媒体に落とす必要がない。現に、学会の発表要旨も活字の冊子ではなく、デジタルで配布（配信）されるところが増えている。また大学のシラバスや紀要もネットで読むようになっているところが多い。

研究者は、自分の研究の成果を、生きた証として後世に残すために本を出版したい、一般の人も自分史を本にして後世に残したいと考える人は多いが、それは今のデジタルの時代に的確な方法なのか考える必要があるかもしれない。

上記のように書きながら、旧世代の者には本のない生活は考えられない。本（棚）に囲まれた部屋にいると落ち着く。本の題を見ただけで、その書籍に書かれていたことが思い浮かび、読んだ当時の心情が蘇る。どんなに意匠を凝らした建築や部屋でも本（棚）がおかれていないと貧相に見える。どんな素晴らし自然や景色も、本（棚）に囲まれた部屋を超えることはできない（と私は思う)。このように、全く違う考えが、私の中で行き来する。

（2022 年 1 月 25 日）

Ⅲ－１　学校の社会的特質について　（神田外語大学講義の記録）

先週は、4 つのことをお話しました。第 1 に教育の社会学の方法やパラダイムに関する「機能主義」、「葛藤理論」、「解釈理論」、「批判理論」という 4 つの方法です。

第 2 に学校の特質について説明しました。一つは家庭と学校の機能の違い（家庭は子どもたちに「所属本位、個別主義、拡散性、感情性、取り換え不可能」という価値を教え、学校は「業績主義、普遍主義、限定性、感情的中立性、取り換え可能」）という価値を教えているということ。

第 3 に学校の潜在的カリキュラムの社会的機能（たとえば、「学校で無意味な規則の黙っ

て従う習性は社会に出たから施政者に都合のいい法律に従順に従う態度を養成する」、「退屈な授業に耐えることは社会の中の繰り返しの多い退屈な仕事に耐える態度を養う」）などについて説明しました。

第４に学校は、①カリキュラム（教科書）、②先生、③児童・生徒（友達）、④学習の場（教室）という４つの要素からなり、その重なりの部分に授業があり、そこが学校の中核だが、子どもたちは授業以外の要素からも多大な影響を受ける、ということを説明しました。

今日は、先週に配布したプリント（武内清「子どの学校生活」『子ども・若者の文化と教育』）を使って、それ以外の学校の社会的特質について説明します。

具体的には、学校文化、教科内容、学校組織の特質、学級集団、一望監視システム、学校の階層的特質、教師―生徒関係、ホームスクーリング、教育家族、学校と子どもの今後などです。

これらの学校の社会的特質の考察から、学校とはそもそもどのようなところで、本当に必要なところなのか、子どもは学校に行かなくてホームスクーリングで学ぶという選択肢があってもいいのではないかなどということも考え、グループでも話し合い、発表していただきたいと思います。（2016 年 5 月 7 日）

Ⅲ―６　知識や知性の動的側面

アクティブ・ラーニング、つまり「主体的・対話的で深い学び」の重要性が盛んに論じられている。これは、静的ではなく動的なことの重要性の強調のように思われる。動的というのは、個人内に留められるのではなく、他者との相互作用（対話等）や社会とかかわりで、外に影響を及ぼすというものである。

知識に関しても、単に個人の中に蓄積されればいいというものではなく、その知識が他者や社会と交わり、影響を及ぼすというものである。学会の大会などは、まさに個人の知識の表明に止まらず、その交換や共鳴で、そこで新たな知識が生まれ、参加者に共有される場である。学校や大学の授業もそのような知識の動的な創造、共有の場になるのが理想かもしれない。

内田樹の「反知性主義者たちの肖像」（内田ブログ 2020.9.3 ）も、そのような文脈の中で理解した

Ⅲ―１１　教育改革と教員の意識

文化的遅滞（カルチュラル・ラグ）という言葉がある。社会の各分野によって変化する度合いが違うというものである。教育という分野は、とかく社会の進歩には遅れがちで、教育制度も教員の意識も旧態依然としていると言われる。産業界や文部科学省から提案される時代の趨勢に合わせた教育改革もそれを実践する教育現場で滞り、骨抜きにされることは

多い。

学校の教員がさまざまな教育改革には懐疑的なことが各種の調査データから明らかになっている。『教育改革に関する教員に意識調査』（中央教育研究所、平成 27　年）のデータで小中教員の意識をみると、教育改革への賛成率は「デジタル教科書の導入」５割弱、「学制（6・3・3 制）の改革」2 割、「公立中高一貫校の設置」1.5 割、「学校選択の自由化」1 割とどれも高くない。高校の「教育課程の改訂」に「非常に関心のある」高校教師は 3 分の 1、「教科横断的な視点に立つ学習活動」には 4 分の 1、英語入試の外部試験には 1 割強の賛成率である。教員は制度的な大きな変化に対しては反対することが多く、学習指導要領の改訂への関心もあまり高くない。その為、多くの教育改革は教育現場で頓挫する。

ただ、教育改革への温度差は、教員の属性によってもかなりある。管理職の教員は、中教審答申や学習指導要領の改訂や関心をもち、それを現場におろす役割を担おうとしている。非管理職や女性教員は、改革への関心は低い（『高校教員の教育観とこれからの高校教育』中央教育研究所、平成 30 年）。

現代の社会は合理化、標準化、分業化、効率化つまり官僚制化がすすんでいる。その波は教育界にも押し寄せている。少子化に伴う学校統廃合や小中一貫教育、チームとしての学校、校長の権限の強化などはその現れである。

一般の教員は、深海魚のように海の底に鎮座して、改革の波をやり過ごす時代遅れの堅物が多いと考えるべきなのであろうか。現実の教員や調査データからは、そのようには思えない。小中の教員はこれまでの教育実践の知識や技法を大事にしている。高校教師は担当教科への専門意識が強く、長年教えてきた自分の教科内容や教育方法への自負をもっている。教師たちは、教育現場に疎い人たちが机上で考えた教育改革案が、学校の現状や子どもたちの現実に対応できないと感じている。

教育が時代の流れと無縁でいいわけではない。子どもたちの出ていく社会は情報化、グローバル化がすすんでいる。教育の論理を大切にしつつ、時代に遅れない教育のあり方を教育現場でも模索していかなくてはならない（「内外教育」2019 年 7 月 2 日号）。

Ⅲ－１５　新型コロナ危機の後の教育

重い病気になった時や死を意識した時、自分にとって何が重要なことなのかに、思いを巡らすことであろう。そのような時こそ、本当に大切なものに気付く。しかし、病気が治り、危機的状況の時に考えたことは忘れ、もとのような功利を求める生活に戻ってしまう。

いま新型コロナウィルスの世界的な蔓延で、私たちの日常生活は一変し、重い病気にかかったような状態にある。そのような時こそ、何が大切なのか何が重要なのかを考えたい。

新型コロナウィルスの感染の拡大は、社会の諸分野に影響を及ぼしている。教育の世界への影響も大きい。とりわけ、長期にわたり学校が休校になったことは、学校中心の生活を送っていた子ども達の生活を一変させた。その影響は計りしれない。休校になり、授業、遊び時

間、部活動、交友もなくなり、子ども達の学びや楽しみが奪われている。そして学びの社会的格差、家庭間格差が拡大している。これまで学校が担ってきた教育機能の重要性や平等性が改めて認識される。コロナ後は、この間に滞った教育機能の回復・補修がまず早急になされなければならない。

一方で、自明であった学校教育の意義も問われている。効率優先の一斉授業、興味のわかない教科の学習、生きる力にならない知識、退屈な学校行事、無意味な校則、教師のストレス解消のお説教など、なくなってみるとスッキリする。これまでの学校教育のあり方の見直しも必要であろう。

休校中の家庭での自由な学習、親子関係の親密化、ウエブ学習、地域の遊び集団など、これまでの学校教育とは違った自由な学習や生活に、子どもたちは本来の興味と活動に目覚めたということもあるだろう。不登校やホームスクーリングも見直されていい。
黒板とチョークを使っての学校での授業に替わり、家庭での遠隔学習を経験した子どもも多い。デジタル・ネイティブの今の子どもにとって、ウエブ学習で、学ぶことの楽しさは増している。コロナ危機後の教育では、ウエブによる教育が学校でも家庭でも盛んになることは必然である。しかし、教育のデジタル化には多くの課題がある。子どもの集中力や深い学びには、ウエブ学習より伝統的な教育（紙とチョーク）が適合的という報告もある（教育のデジタル化のすすんだ県が全国学力テストの得点は高いわけではない等)。

コロナ危機は、経済や政治の分野でも大きな変化をもたらし、教育にも跳ね返ってくる。経済的な不況による教育費の削減、危機管理を名目にした超管理社会への移行など。危機後は教育力の維持、教育的格差の是正、民主主義の維持などがなされなければならない。
（内外教育　2020 年 5 月 12 日号）

Ⅳ－４　　師匠としての作田啓

直接教えを受けた先生（恩師）ではないが、その著作を読み感銘を受け、師と崇める人がいる。私にとって、社会学者の作田啓一はそのような人のひとりである。

氏の著作『価値の社会学』（岩波書店、1972 年）を何度読んだことであろう。1 冊目はボロボロになり、2 冊目、3 冊目も購入した。ゼミのテキストでも使ったことがある。
私のようなものでも影響を受けたのだから、作田啓一が、日本の社会学や教育社会学研究に与えた影響は、とても大きかったのではないかと思う。

作田啓一は、永く京都大学の教養学部の社会学の教授だったので、関西では直接教えを受けた人が多かったと思うが（京大出身の井上俊、柴野昌山、竹内洋など)、関東にいる私は本でしか知らず、いつか京都に行った時、作田啓一らしき人を京大近くでバスからみて感激した。上智大学での社会学会の大会が開催された際は、部会の発表は聞かず、司会の作田啓一ばかりを見ていた覚えがある。

作田啓一は、社会学の理論家として卓越していただけでなく、文学にも造詣が深く（漱石

やドフトエフスキーに関する本も書いている)、その文章は緻密で味わいが深い。

私は院生の頃、朝一番で氏の文章を読む習慣があった。すると頭がすっきりとし、その日の勉強がすすむ。このような文章が書けないものかといつも思っていた。仏文学者の多田道太郎との親交も厚く、多くの文学や文化的な共同研究があり、学問とはこのように楽しいものかということを教えられた。

「師と仰ぐ」ということは、遠くから尊敬をして憧れているということである。畏れ多くて、その人と話そうと思ったことはない。その作田啓一が、亡くなったという記事を今日の新聞で読んだ。ご冥福を心よりお祈りする。(2016 年 3 月 18 日)

Ⅳ―８　相手を思いやるということ

「相手を思いやる」や「相手の立場に立って考える」ということは、道徳教育の項目にもあがっているし、多文化教育の「転換アプローチ」(相手の立場から考える) もそうであり、重要なことである。しかし、実際は行き違いもあり、次元の違いもあり難しい。

こちらが相手のことを思いやって言ったり行動したりしても、その言動が理解されず、恨まれる場合がある。さらにややこしくなるのは、相手もこちらを思いやっている場合である。その思いやりが自分を傷つける場合がある。それも、お互いを思うゆえにである。

親がゲームばかりしている子どもを叱り、ゲームを辞めさせるのは、ゲームをしたいという子どもの意向を禁止する、思いやりのない行動ではなく、子どもの将来を考えた思いやり行動である。自分に片思いの相手に冷たくするのは、相手に自分に対する未練を早く断ち切ってふさわしい人を探してほしい、という思いやり行動である。これらの行動は、今理解されなくても、いずれわかってもらえるので問題はない。ここで問題にしているのは、これとは違う。

今評判の韓国ドラマ「愛の不時着」の 15 話で、恋人同士がお互いに、警察で自分が罪を被り、相手が罪を免れるような供述をする場面がある。二人はそれぞれ自分を犠牲にしての相手の幸せを願って、このような供述をする。ところが、相手の為を思って自分がした供述（罪は自分の側だけにある）は、自分の幸せを一番願っている相手の願望を真っ向から否定するものである。お互いに相手の為を思った供述が、相手を深く愛する二人故に、お互いの思いとは逆の結果を招く（浅いレベルでは、相手は罪を免れ幸福になるかもしれないが、自分の幸福を何よりも願う相手の願望を否定する)。それでお互いに、死ぬほど傷つく場面がある。(囚人のジレンマの逆？)

シエル・シルヴァスタイン著・村上春樹訳『おおきな木』（あすなろ書房、2010）では、リンゴの木は少年が好きで。その願いをかなえることに生きがいを感じている。少年に、自身（リンゴ）の実、枝、幹を提供し、自分は切り株になっても後悔はしない。少年の為になることが至上の願望だからである。一方少年は、そのリンゴの願望を当たり前のことと考え、リンゴの木が自分に幹まで提供し切り株になっても、それがリンゴの願望をかなえること

なので、悪いことをしたという意識はない(読者もそう読む)。

この「愛の不時着」と「大きな木」の意識の違いは何なのであろう。前者は恋人同士であり、後者は母―子関係だからであろうか。前者は対等であり、後者は母親の子どもへの無償の愛が前提になっているからであろうか。(ドラマ「屋根裏のプリンス」の場合、片思いの側の相手への無償の愛の要素もあり、後者に近い面もある。)このように、ものごとには、深さもあり、相手の気持ちもあり、一筋縄ではいかない。(2020 年 7 月 9 日)

VI―２　人との初対面の会話内容

人に会った時、どのような内容の会話をかわすのか。特に初対面の人との会話内容が気になる。

江藤淳の『アメリカと私』の中で、江藤淳がプリンストンで初対面に近いジャンセン教授に会った時の様子が印象に残っている。人は初対面の人とこんな難しい話をするのかと。

＜私たちは、アパートの話に移る前に近衛公の性格を論じていた。(中略)このような話は、私にとってと同様に、教授にとっても、わずらわしいアパートの話よりはるかに愉快な話題であるらしかった＞(『アメリカと私』講談社、1969 年、35 頁)

昔大学の武蔵大学のゼミの最初の時、皆に自己紹介をしてもらったが、その内容は出身地や出身高校、趣味などを話す学生が多かった。同じようなことを期待して、非常勤で担当した東大の大学院の演習で、受講生に自己紹介をしてもらったところ、個人的なプロフィールの話は一切なく、「私の研究テーマは○○です。その内容は××です」という話が続き、さすが東大の大学院生と感心したことがある。

最近近所に住む 80 歳を過ぎた元大学教員の人と知り合い、「話に来てください」と言われ、その人の自宅を訪ね、2 時間ほど話をした。個人的なことをどの程度話したり聞いたりしていいのか戸惑いながらの会話であったが、お互いに知りたいのは、お互いの研究のことだったと思う。その方は、西洋史が専門のようで、ザビエルについて最近もかなり長い論文を大学の紀要に書いており、いろいろ尋ねてみた。日本の近代化に関心があり、それをザビエルの来日を通してその起源を歴史的に探りたいと思ったとのこと(80 歳を過ぎてのその探求心に感嘆した)。「あなたの専攻する社会学では、近代化をどのようにとらえていますか？」と聞かれ、いきなりの直球の質問に私の答えはしどろもどろになった。次回は、きちんと勉強し用意して、会話に臨もうと思った。(2020 年 3 月 12 日)

VI―９　地上波のテレビではなくネットの時代

映画やドラマの見方が今変わってきている。これまでは映画は映画館、レンタルのビデオ、テレビでの放送などで見るしかなかった。またテレビドラマは放送日に見るか、録画してみるしかなかった。今は映画やドラマはネット配信のものをテレビや PC で好きな時に見るこ

とができるようになっている。従来型の見方をしている人も少なくないが、後者のネット配信を体験してしまうと、その便利さ快適さに惹かれ、後者に切り替える人が多くなっていると思う。（もちろん従来型で、テレビの「朝ドラ」や「大河ドラマ」のような、テレビの番組の放映時間が、生活のリズムになり快適さを感じている人はいる）

制作側の手順も変わりつつある。これまでは劇場用映画を作りそれが DVD 化される、あるいは定期的な時間配信の為のテレビドラマの制作（その後 DVD 化されるものもある）であったものが、今はネット配信だけの為に制作されるドラマや映画が出てきて、斬新な脚本や俳優起用で、時代の先端を行くドラマや映画が作られるようになっている。一早くその方式を採用しているのが韓国ドラマだ。そのことを、韓国ドラマに詳しい藤脇 邦夫が指摘している。（2021 年 12 月 15 日）

Ⅵ―１３　狩猟について

今年の大学入試センター試験の国語の問題にも出た河野哲也『境界の現象学―始原の海から流体の存在論へ』（筑摩書房、2014）を読んでいたら、狩猟のことが書かれている箇所があり、食の問題への 1 つの切り口になるように感じた。また、狩猟は、その狩の場に溶け込むことが大事と書いてあり、人が何かを判断する時の有効な方法であることも知った。

狩猟は、農耕とは違い、定住せず、手つかずの自然（wilderness）に分け入って、動物を追い、食うか食われるかの戦いをひろげることだという。人間は猟に敗れ、動物（たとえば熊）に襲われ食べられてしまうこともあるという。狩猟は「飼育」とは違い、動物を殺すか自分（人間）が殺されるか対等な立場にある戦いであるという。生きるためには、相手を殺さざるを得ず、食うか食われるかの戦いが狩猟である。（動物との対等の）戦いであるのなら、「飼育」のような後ろめたさはない。殺して食べることはできるかもしれない、あるいは殺されても諦めがつく。もう一つ感心したのは、狩猟はその狩の場に身を潜め、その場の全体状況を把握し感じ、時が来れば一気に行動を起こすこと必要があるという。農耕のように先を見こして計画してことを運ぶのでない。狩猟のように、全体の場の空気を読むというのは、受け身ではなく、ものごとをなす重要なことということ知った。

Ⅶ―２　村上春樹『女のいない男たち』（文藝春秋、2014 年）

村上春樹の小説が、1 年ぶり(短編小説としては 9 年ぶり)に出版された。さっそく購入して読む。村上ワールドは健在だ。

「女のいない男たち」は、「女抜きの男たち」ではなく、「いろいろな事情で女性に去られてしまった男たち、あるいは去られようとしている男たち」(p9)の物語。

男たちにとって、女性の存在はとても大きい。女性がいなくなった世界がいかに空虚な世界なのかが、描かれている。村上春樹らしい恋愛小説である。

登場人物の女性は、皆美しく、知的で、思慮深く、魅力的だ。それに対して、村上春樹の男に対する目は厳しい。男には奥行きの深さ（教養）が、要求される。

「僕の奥さんは意志が強く、底の深い女性だった。時間をかけてゆっくり静かにものごとを考えることのできる人だった」、（妻の恋人は）「たいしたやつではないんだ。正直だが奥行きに欠ける。なんでもない男に心を惹かれ抱かれなくてはならなかったのか」

描かれている主人公の男たちは、素敵な女性に去られてしまって、生きる意欲も失い、死んでしまうものまでいる。その女性が彼のもとを去った理由がよくわからない（つまらない男にひっかかったのかもしれない）。それでも、男は女性への思いと敬愛を捨て去ることはない。村上春樹は、すごいロマンチストだ。フェミニストと言ってもよい。

最後の２編（「木野」と「女のいない男たち」）は、トーンが少し違っている。「木野」は祟りの物語である。猫が去り、蛇が多数出没し、場所が欠けてしまい、悪霊に祟られ、それを払う旅に出る。

「女のいない男たち」は、主題のまとめのようになっていて、文章が村上春樹特有の修辞に充ちていて感心する。「ある日突然、あなたは女のいない男たちになる。その日はほんのわずかな予言もヒントも与えられず、予感も虫の知らせもなく、ノックもなく、、」

（2014 年 5 月 11 日）

Ⅶ―７　宇佐見りん「推し，燃ゆ」（『文藝春秋』　2021.3 月号）

第 164 回芥川賞を受賞した宇佐見りん「推し，燃ゆ」を読んだ。 不器用で何事にもうまくいかない（家庭に問題があり、高校にも適応できず退学する）少女がアイドルへの「推し」で、自分の肉体や心の痛みを浄化する物語である。

（アイドルへの）「推し」というのは、「片思い」の一つのバリエーションかもしれないと思った。多田道太郎が言うように「それはオリジナルの向こうに、オリジナルを超えて自分だけの夢をみることである。自分だけの夢、自分だけの『オリジナル』を夢みることである」（『管理社会の影』（日本ブリタニカ、1979 年）。もし，ほんとうのオリジナルである「推し」の彼が目の前に現われ「付き合おう」と言われれば、彼女は「それは違う」と言うであろう。

（以下、宇佐見りん「推し，燃ゆ」より一部転載）

「見返り求めているわけではないのに、勝手にみじめだと言われるとうんざりする。あたしは推しの存在を愛でること自体が幸せなわけで、お互いがお互いを思う関係性を推しと結びたいわけではない。たぶん今のあたしを見てもらおうとか受け入れてもらおうとかそういうふうに思ってないからでなんだろう。あたしだって、推しの近くにずっといて楽しいかと言われればまた別な気がする。もちろん、握手会で数秒言葉をかわすのなら爆発するほどテンション上がるけど。携帯やテレビ画面には、あるいはステージと客席には、そのへだたりぶんの優しさがあると思う。相手と話して距離が近づくこともない。一定のへだたりのある場所で誰かの存在を感じ続けられることが、安らぎを与えてくれるということがある

ように思う。何より、推しを推すとき、あたしというすべてを賭けてのめり込むとき、一方的であるけれどもあたしはいつになく満ち足りている」(『文藝春秋』 2021.3 月号、376 頁)

その文章は、「確かな文学体験に裏打ちされた文章」(山田詠美)、「リズム感の良い文章」(松浦寿輝)、「文体は既に熟達しており、年齢的にも目を見張る才能」(平野啓一郎)、「レディメードの文章の型を踏み外してゆくスタイル」(島田雅彦) と、芥川賞選考委員から絶賛されるもので、読んでいてそのリズム感が心地よい。「寄る辺なき実存の依存先という主題は、今更と言ってもいいほど新味がなく」という平野啓一郎の批判もあるが、芥川賞としては久々のこの賞にふさわしい、今後に期待される新人が選ばれたと思う。(2021 年 3 月 6 日)

Ⅶ―８　遠藤周作『結婚』(講談社、1962 年)

暇で、手元にあった小説を読んだ。読んだ本は遠藤周作の『結婚』。遠藤周作 (1923-1996) が 40 歳前後の時に書いたもので、今から 60 年くらい前のもの。その頃はお見合い結婚が多く、堅実な堅物な男とお見合い結婚した女性が、真面目な夫に生活の安定を感じながらも、何か物足りない、若い時の淡い恋 (初恋の相手が徴兵で戦地に赴く前の思い出等) を思い出すというものが多い。一つ、気になった短編があった。

それは、5 話の「夫婦の損得」。学歴もなく背も低くあまり見栄えもしない平凡な男が、姉の持ってきた田舎出身の同じく背の低い、目鼻立ちのぱっとしない娘を嫁にもらい、結婚生活を始めるのだが、「こちらはお前を食わしてとる (のに)、お前は気がきかん」と妻を叱ることが多かった。妻は、叱られるたびにますますおどおどとして不器用になり、黙ってしまう。そして、妻は 1 年目は木の根のように丈夫だったが、2 年目から熱を出し始め、医者に行くと「白血病」と診断され、入院して 1 年余りで亡くなってしまう。

男の思いは、「結婚にはツキがなかった」「妻の病気によって妻から何もサービスを受けぬ夫になってしまった」「なんのために結婚したのかわからぬ」というもので、姉からも「本当のことを言えば、(彼女がなくなって) ほっとしただろう」と言われるものであった。妻の死後、たまたま次のような妻のメモ書きを見て、男は驚き、悔いたという話。その妻のメモは、次のように書かれていた (一部転載)。

「私はあなたに何かしてあげたいけれど何もできない。だから、私は今の自分の病気が、もしあなたがいつか病気になった時の身代わりであるようにいつも神さまや仏さまにお願いしているのです。あなたがその時、苦しまないように、私にもっと、もっと痛さや苦しみを与えてくださいと祈っているのです。それが、それしか、私はあなたにしてあげられません。でも夫婦なのですもの。それだけでも私はうれしいので…」

夫が「この結婚によって受け取るものがなく損をした」と感じていることを知っていた妻が、そのような損得勘定の打算的な夫に対する思いが、(普通考えもつかない) 深い愛の気持ち (祈り) だということある。

これは著者の遠藤周作がカトリック信者だということと関係しているのであろうか。この妻の思いは、遠藤周作の『沈黙』や『私が捨てた女』に出てくる登場人物に通底するもので、宗教的なものであると思う。同時に、江藤淳のいうような日本的な「母」の文化（『成熟と喪失』）もそこに感じられる。（2021 年 4 月 12 日）

Ⅶ―１３　敬愛大学教育こども学科の１年生に薦める本

私の授業を遠隔で受講している新入生に、学生生活の送る上で参考になる本をいくつか推薦した。今の大学生はあまり本を読むことはないと思うが、コロナで自宅に籠ることの多い今の時期こそ、読書のチャンスと思う。読書は能動的な行為であり、流れてくる情報を受け身で受けとめるテレビ視聴などとは違う、達成感がある。

１　柴田翔『されどわれらが日々』(1964 年、文春文庫) ―　半世紀以上前になりますが、私たちが大学生になった時の必読書でした。恋愛や学生運動がテーマで, 未知の世界のことで、ドキドキして読んだ覚えがあります。今は古すぎるかもしれませんが、かえって新鮮かもしれません。この作品は芥川賞を受賞してものです。その後それぞれの時代を象徴する青春小説が、芥川賞を受賞しています。庄司薫『赤ずきんちゃん気を付けて』(1969 年)、三田誠広『僕って何』(1977 年)、田中康夫「なんとなくクリスタル」(1980 年) と続きます。

２　夏目漱石　『三四郎』―　これはもっと古い明治の時代の話ですが、地方から東京に上京してきて大学生活を始めるウブな三四郎の大学での生活や失恋の話で、今読んでも感銘することも多いことでしょう。名作です。夏目漱石には、失意の時に読むと、心慰められる作品が多くあります。

３　重松清　『きみの友だち』(新調文庫) ―　これは私が敬愛大学の学生からすすめられて読んだ本で、読みやすく、その後私は重松清の本を何冊か読みました。小学生が主人公で、友人関係やいじめのことが、子どもの視点から書かれている小説で、教育学や心理学の本以上に、子どもの心理がわかると思いました。

４　村上春樹『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』(文藝春秋) ―　高校時代の 5 人の友人グループ（男 3 人、女 2 人）の高校生活とその後を描いたもので、主人公のつくる君がなぜ他の 4 人から排除されたのかの謎解きのミステリーの話で、一気の読める本です。村上春樹については、人により好き嫌いがあると思いますが、今日本で一番有名な作家なので、1 冊は読んおきたいものです。初期の短編も読みやすくミステリアスですし, エッセイはおしゃれで心温まります。。

５　カズオ・イシグロ　『わたくしを離さないで』(ハヤカワ文庫) ―ノーベル文学賞を受賞したカズオ・イシグロの代表作です。舞台は　イギリスの全寮制の学校生活とその後ですが、人とは何かを深く考えさせられます。少し哀しい話ですが、心に残る小説です。

その他にお薦めしたい本はたくさんありますが、皆さんに一気にお薦めしても、困惑されるだけだと思いますので、今回はこれで止めますが、1 冊でも読んでいただけると嬉しいです。(学校や大学生活に関する本ばかりになりましたが) (2020 年 5 月 17 日)

Ⅶ―１４　小説やドラマから学ぶ

新型コロナ禍の自粛で、本を読んだりドラマをみる時間が増えている。最近読んだ本や見たドラマから、教育のこと考えてみたい。

村上春樹著『猫を棄てる』（文藝春秋、2020）には、村上の父親が 20 歳の時徴兵され、中国大陸の戦線に参加したことが書かれている。村上はその責務も感じている。「我々は、広大な大地に向けて降る膨大な数の雨粒の、名もなき一滴に過ぎない。固有ではあるけれど、交換可能な一滴だ。しかしその一滴の雨水には、一滴の雨水なりの思いがある。一滴の雨水の歴史があり、それを受け継いでいくという一滴の雨水の責務がある」と。

カズオ・イシグロ『クララとお日さま』（早川書房、21）は、高度な人工知能を搭載した人型ロボットが語る近未来ＳＦ小説である。人工親友ロボットのクララはずば抜けた観察力と学習能力で、病弱の少女に優しい心で接し、少女の成長を助ける。少女が成長し不要になり捨てられてしまう。人工ロボットの献身的な生き方が描かれ、その純粋さ、健気さに、そして哀しい結末に心打たれる。

韓流ドラマ「梨泰院クラス」には片思いがたくさん描かれている。ヒロイン・イソの相手に対する片思いは、彼を傷つけるものに対しては身を挺して守り、敵を殲滅するという強い意志に基づいたものであり、動物の母親が子を守る姿に似ている。その思いが相手に伝わらないのは悲しいが、そのことで気持ちが怯むことはない。

ドラマ「秘密の森」は、韓国の派閥や情実がはびこる検察・警察組織の中で、脳の手術で感情を欠き認識能力のみが卓越した主人公が、正義感で犯罪を摘発し、組織の腐敗を暴いていく物語。

これらの小説やドラマから、個人の尊厳、過去の歴史を引き継ぐ責務、献身的な生き方、無償の愛、正義感など、道徳教育に通ずる内容を読み取ることができる。

これらは混濁とした現実の政治や社会にはみられない現象である。生き方のモデルや価値として子どもや青年たちに示したい。（内外教育「ひとこと」2021 年 10 月 5 日）

Ⅷ―１　何回も観たい韓国ドラマ

何回も繰り返し観たくなる韓国ドラマをあげるとすると、次の６つをあげることができる。「ある春の夜に」（ハン・ジミン、チョン・ヘイン主演）、「よくおごってくれる綺麗なお姉さん」（ソン・イェジン、チョン・ヘイン主演）、「マイ・ディア・ミスター　；私のおじさん」（パク・ドンフン、イ・ジアン主演）、「梨泰院クラス」（パク・ソジュン、キム・ダミ主演）、「RUN ON；それでも僕らは走り続ける（イム・シワン 、・ シン・セギョン主演）」、「秘密の森」（チョ・スンウ、ペ・ドゥナ主演）である。

何回も観てしまうのは、それだけロスがあるのかもしれない。見るたびにさわやかな気分になったり、癒されたりする。（「秘密の森」は少し違うが）（2021 年 10 月 27 日）

Ⅷ―４　韓国ドラマ　「マイ・ディア・ミスター～私のおじさん～」(2018)

全 16 話を、ネットフリクスで見終わった。見終わるのに 1 ヵ月くらいはかかったように思う。人に薦められて見はじめたが、最初の方は何か暗く、韓国の庶民階層の暗い生活がいくつも、脈絡もなく描かれているようで訳が分からず、かなり早い回で見るのをやめてしまった。その後断続的に見て、後半になるとあまりにドラマチックで次の展開が読めず、ハラハラドキドキしながら見た。

人生に敗れた人々が酒を一緒に飲み、傷を嘗め合いながら何とか生きていくもどかしい場面も多くありながら、何か温まるストーリーであった。韓国では家族の繋がりが強い、兄弟がこんなに仲がいいのか、同郷の絆も強い、学校の先輩後輩関係は後まで響くなど、日本との違いも知った。このドラマは、中心の二人だけでなく、脇役の人たちの人生も味わい深い。特に、ヒロインも含め個性的で魅力的な 4 人の女性が登場しているのもいい。

このドラマの人間関係は、どの関係も皆ギクシャクしている。それは、現代社会の人間関係がそれだけ難しくなっているということの表れでもある。唯一安定しているのは、生育家族（生まれ育った家族）の人間関係である。韓国の伝統的な家族主義的な関係が結局基本にあるように描かれている。子どもが大きくなっても母親が子どもを思い、子どもも母親を一番大切にする。兄弟は喧嘩しながらもお互いを気遣い、兄弟の幸せや悲しみを共有する。生育家族との関係が強すぎて、主人公（ドンフン）の夫婦関係はうまくいかない（奥さんは主人公が最も嫌う男と浮気までする)。

主人公（ドンフン）の兄(サンフン)は職場を首になり、家で酒ばかり飲み、娘の結婚の御祝儀をねこばばまでするようになり、奥さんに愛想をつかされる。弟（ギフン）は、映画監督として一度脚光を浴びたものの才能のなさに気付き、主演女優にその責任を押し付け、その罪悪感とその女優への愛情と後ろめたさから、慕ってくれる彼女の気持ちを受けとめられない。天才肌の友人は、理想的な近代家族の限界を感じ、相思相愛だった女性と別れ、僧侶になってしまう。

主人公とヒロイン（イ・ジアン）の関係は、上司と部下、叔父と姪（父と娘)、援助者と被援助者、詐欺の標的、恋人関係、というさまざまな要素を内包しながら動的に展開し、最後に行きつくところはどこなのかわからず、ハラハラさせられる。

現代は、伝統的社会の安定した家族関係、近代社会の友愛を基礎にて成立する核家族ではやっていけなくて、さまざまな人間関係が交錯する中で、皆苦しみながらも、過去は「どうってことない」と目をつぶり、「ファイト」と未来に向けて歩く（時に「かけっこ」もする）生き方（「リジリエンス」な生き方）をする時なのであろう。そのようなことを考えさせられるドラマである。

ネットから感想を少し、転載しておく。私と同じような感想が綴られている。

「とても良いドラマでした。最初は良さがわかりませんでしたが、それぞれの心の動きや相手に対する気持ちの変化が見えて来て、どんどん嵌まって行くドラマです。本筋を支えるそ

れぞれの出来事も涙と笑いが満載で楽しめます。とてもお薦めのドラマです」「あまりにも重い内容に始めは戸惑いましたが、見ていくうちにすっかりはまってしまいました」「辛い人生をいきる女性とその女性を取り巻く人々。目を背けたくなるようなシリアスな場面もあるけれど、人生について考えさせられる時間を与えてくれました」「見終わってみれば、人情物語であたたかな気持ちになれます。優しい人間に癒される、そんなドラマです。」（2020 年 12 月 26 日、29 日）

IX　花紀行

草木や花に惹かれ、いろいろ見に行きたくなるのはなぜだろう。江藤淳は『成熟と喪失』（1967）の中で、「日常性の危うさを感じる人が、草木や花といった自然に目が行く」と書いている。私の中に何か危うさがあるかもしれない。でも人は歳と共に関心が、花→盆栽→石と移るといわれる。石を愛でるようになったら危ないが、花や草木ならまだ大丈夫かもしれない。

さらに、江藤淳は「自然に関心がない人は、人工的なものに浸食され、自然を奪われ、人間に集中することを余儀なくされている」とも書いている。草木や花への関心は人工的なものへの浸食が少ないともいえる。この 1 年半くらいの「花紀行」をまとめてみる（ブログの方には、それぞれ数枚の写真も掲載している）。

IX―１　菜の花が満開

千葉市にはまだ自然が残っている。ただ財政難なのか自然が手つかずで放置されているところも多い。家から車で 10 分のところにある花島公園の下を流れる花見川沿いは、いい散歩道・自転車道になっている。しかし川べりは雑草が生い茂り、夏草が枯れたままになっていて風情もない。ただ川べりの一部に小学生が種を植えたという菜の花が今満開で、散歩が楽しめた。

その菜の花を見ながら、今朝 you tube で聴いた曲（南沙織が吉田拓郎と「菜の花をあなたに摘んであげたい」という歌う曲「春の風が吹いていたら」）が耳の奥で鳴った。
（2021 年 3 月 6 日）

IX―４　日光、水上の紅葉

例年であれば、10 月下旬は紅葉の季節であろう。この週末は、紅葉を求めて千葉から北上したが、どこも紅葉はまだで、綺麗な紅葉は見ることができなかった。

車で日光のいろは坂を登り、さらに中禅寺湖畔を少し登ったところにある半月山展望台から、日光の中禅寺湖と男体山との眺めると、色づき始めた木々の葉はきれいで、それなり

に楽しめた。

今回のコースは、日光→奥日光→片品→沼田→月夜野→苗場→湯沢→六日町→八海山→苗場→猿ヶ京→水上→谷川岳である。

紅葉がまだの為、苗場のゴンドラと谷川岳散策を諦めたのは残念。温泉は、苗場、湯沢、猿ヶ京で入った（皆、源泉かけ流し）。

特によかったのは、丸沼高原（山や道には雪）、苗場のボードウォーク（フジロックの名残り）、美味しいヘギ蕎麦（中野屋・塩沢店）、魚沼スカイラインの眺め、水上の辺鄙なところにある気品のある「天一美術館」である。紅葉の時期に再訪したい。（2021 年 10 月 24 日）

Ｘ－７　高齢者とテニス

今日（１月４日）午前 11 時からテニスの初打ちをした。平日の昼間からテニスや卓球をするというのは、大学教師や自由業の人でもやらないであろう。そのようなことが出来るのは退職した高齢者の特権である。

私の参加している毎週火曜日 11 時から 2 時間の「テニス打ち方教室」（千葉市長沼原勤労市民プラザ）は、参加者は暇な高齢者ばかり十数人だが（年齢の若い男性、女性もそれぞれ少数はいる）、どうも私が最高年齢のような気がする（実際は私より歳上は２人いたが）。それだけテニスは、手首や腕だけではなく足も全身も使うハードなスポーツなのかもしれない。

私のようにテニスと卓球の両方をやっている人は少ない。それぞれどちらかに打ち込み、週に何回もやっている人が多い。昔はゴルフをやっていて今はテニスという人はいる。昔ゴルフで今は卓球という人はあまり聞かない。ゴルフとテニスと卓球と、スポーツとしてどこが違うのか。使う面積や費用は格段に違い、何となく社会的格差－ゴルフ、テニス、卓球の順ーがあるような気がする。青少年の頃のやったスポーツと年取ってからのスポーツは同じなのか違うのか。（2022 年１月４日）

Ｘ－８　高齢者の相手をしてくれるのは野生の鳥だけ？

野生の鳥は冬場餌がなく困っていることであろうーそんな勝手な想像をして、昨日も午後４時に近い夕方なのに、検見川浜にパンやご飯粒を持って出かけた（車で 12～3 分）。やはり夕方なので、昼間はたくさんいる鳩やカモメの姿は一匹も見えなかった。多くの鳥は夕方ねぐらに帰るのであろう。飛んでいるのは少数のカラスと、群れで戯れているスズメと、海辺に浮かんでいる鴨だけであった。雀は少しパンの切れ端を警戒しながら突っつき咥えて飛び立つが、海辺の鴨は近づくと沖の方に逃げてしまう。

私のように鳥に餌をやる高齢者は時々いて、紙の袋から餌を出し、遠慮がちにあげている。

老人の相手をしてくれるのは野生の鳥だけというのも、少しわびしい。その鳥も夕方にはねぐらに帰ってしまう。(2022 年 1 月 24 日)

Ｘ－９　そこに居場所がない　寂しさ

昨日は、上智大学の大学事務局に用事があり、久しぶりに上智大学新 2 号館に行った。自分が 20 年間勤め、研究室のあったところが、今は自分の居場所ではない、というのは不思議な感覚である。自分がいなくても、自分がいた頃と同じような日常が滞りなく回っている。それは、一種のさびしさの感じでもある。

昔、10 年勤めた武蔵大学に非常勤で行っていた時、ちょうど教授会が開かれていて、それが外から窓越しに見えたが、自分はもうそこの一員ではないし、どんなに懐かしくても、そこに入ってはいけないのだと知った時の、衝撃は大きかった。

もしかすると、それは、自分の死後、自分のいた家族や職場やさまざまな人間関係が、自分抜きで回っているのを、天から（あるいは地下から）見る時の感覚かもしれないと思った。

（2012 年 9 月 14 日）

Ｘ－１０　私はなぜ教育学の研究者になったのか　―自分史

私の場合、なぜ教育学の研究者になったのかと人からから聞かれても、明確に答えることができない。気が付いたら、大学で教育学（教育社会学）を教えるようになっていたというのが正直なところである。

大学へ最初は理系に入学したが、自分には合わないと感じ、三年次に教育学部に進学した。私が学んだ 1960 年代の東大の教育社会学コースでは、主任の清水義弘教授は中央教育審議会の委員をしてマンパワーポリシーを先導していた。松原治郎助教授は「社会開発と教育」という本を出版し、社会開発への教育の役割を提起していた。両先生の関心はマクロな教育政策にあり、ミドルの学校やミクロな人の心理には向いていなかった。それらは私の関心を引かず、当時は教育の本は読まず、小説ばかり読んでいた。

大学卒業後の進路先も決まらぬまま大学４年の９月になり、中学校に教育実習に行った。当時たまたま木原健太郎著『教育課程の分析と診断』（誠信書房）を読んだ。教育社会学にもこんなに面白い本があるのかと思った。その内容は、木原教授が名古屋の小学校のクラスに入り込み、エスノグラフィーの手法で、児童の実態やその家庭背景を調べ、自ら作ったアナライザーも使い授業分析をするもので、学級の中で起こっていることが児童の生活のデータも含めて生き生きと描き出されていた。感激の余り小学校で調査の真似ごとをし、そのデータで卒論を書き、大学院に進学した。

大学院では、御茶の水女子大学の河野重男教授の演習もあり、「学校社会学」の面白さを学んだ。特に高校研究や生徒文化研究に興味をもった。6 月に「東大紛争」が起り、ほとん

ど研究もしないまま一年間が過ぎ、短期間で「学級集団の研究」というテーマで、英米の学校社会学の研究を参照し、学級集団を教師と児童・生徒の文化葛藤からみる視点で、修士論文を書き上げた。

博士課程の時、私立の開成学園高校の「倫理・社会」非常勤講師として半年間、教壇に立った。当時受験競争の真っただ中の時代で、受験に翻弄される高校生の姿を目の当りにした。成績上位の生徒は受験中心の高校生活に何の疑問も抱かず、中位の生徒は受験を適当にやり過ごし、下位の生徒は無気力になっていた。

研究室の助手時代は、清水教授の科研費の研究「高校の適正規模の総合的研究」を手伝った。当時第二次ベビーブームの生徒の為の高校増設期で、どの規模の高校が適切かをデータで検証する時代にかなった研究だった。全国の高校生のデータをもとに、高校の規模別に生徒の学校生活が違うかを検証したが、一定の傾向が見出せなかった。しかしそこに「高校間格差」という変数を投入してみると、はっきりした傾向が見出された。格差の上位の高校は伝統もあり指導が確立しているので学校規模が大きくなっても問題がないが、新設校で大規模校を作ると伝統もなく教員の意思統一が出来ず指導が行き届かず生徒は荒れや不適応を起こしていた。この研究から、マクロな教育制度が、ミクロな生徒文化や生徒の学校適応と密接に関連していることを知った。

東京の中堅の武蔵大学に専任講師として勤めるようになって、ゼミの学生たちと、大学生の学生文化の特質をデータで明らかにした。たとえば学生の席の位置と受講態度や日頃の行動やファッションとが関係するという仮説で、33 教室で席別に 100 名余の学生の受講態度とファッション、日常生活を観察とアンケートで調べた。

上智大学に移ってからは、研究仲間と大学間の学生調査を四回実施し、学会発表、報告書、本（『キャンパスライフの今』,「大学とキャンパスライフ』）を出版した。文科省主導で高等教育の改革は急速に進んだが、そこに学生の実態に関する視点が欠けていること感じた。同じ大学生でも、大学の類型により、学生の学習動機も学生文化も大きく違っていた。学生の実態から大学教育のあり方を探った。

敬愛大学こども学科に勤め、教員養成の学科に入学してくる学生は、子ども好きで素直な学生の多いこと感じた。遠隔授業で、学生に読解力、文章力のあることも知った。教員養成の大学が、学生を熱心に指導すれば、これからの日本の教育は安泰なのではないかと感じた。

私の研究を『学生文化・生徒文化の社会学』（ハーベスト社 2004 年）にまとめたが、主に調査データや生徒や学生の実態から教育のあり方を考えるものであった。

（『教育展望』　2020 年 9 月号）

武蔵大学ゼミ同窓会挨拶原稿